

『伊勢物語』 中世注釈書における『源氏物語』の参照

ジョシユア・モストウ

鈴木 紗江子 訳

要旨

『源氏物語』（1008頃）が書かれたのは、『伊勢物語』（880頃）の原型の成立に遅れるところ百余年である。それにもかかわらず、室町から江戸時代にかけての注釈者たちは、しばしば『伊勢物語』中の言葉や文章の解釈のために、『源氏物語』のテキストを参照している。この解釈の方法は、一条兼良（1402-1481）著『伊勢物語愚見抄』をはじめとして、宗祇・三条西家に講釈・伝授された注釈、牡丹花肖柏（1443-1527）著『伊勢物語肖聞抄』、清原宣賢（1475-1550）著『伊勢物語惟清抄』に、その例を見ることができるといえる。しかし、『源氏物語』の参照が劇的に増えたのは、細川幽斎（1534-1610）著『伊勢物語闕疑抄』と北村季吟（1624-1705）著『伊勢物語拾穂抄』によってである。本稿は、『伊勢物語』の文章を解釈するため『源氏物語』に言及した数例を考察し、このようなテキスト性（インターテクスチュアリティ）が作品理解にどのような影響を与えたのかを考察する。

『源氏物語』(1008頃)の成立は、『伊勢物語』の原型(880頃)に遅れるところ百余年にもかかわらず、中世の注釈者たちはしばしば『伊勢物語』の解釈に『源氏物語』を参照する。『源氏物語』を通じて『伊勢物語』を読むことは、中世の注釈者たちの解釈にいかなる影響を及ぼしたのであるか。この問いに答えるため、以下の注釈書における『源氏物語』参照を考察することにする。

- ① 一条兼良 (一四〇二―一四八二) 著『伊勢物語愚見抄』⁽¹⁾
 - ② 牡丹花肖柏 (一四四三―一五二七) 著『伊勢物語肖聞抄』(1477)
 - ③ 清原宣賢 (一四七五―一五五〇) 著『伊勢物語惟清抄』(1522)
 - ④ 細川幽齋 (一五三四―一六一〇) 著『伊勢物語闕疑抄』(1596)
 - ⑤ 師の松永貞徳説を含む北村季吟(一六二四―一七〇五)著『伊勢物語拾穂抄』(1680)
- これらの注釈書は全て、『伊勢物語』中の二十一章段、二十六の語もしくは句について、『源氏物語』を参照する(表を参照)。

最初に『伊勢物語』初段について、本稿が取り上げた最古の注釈者である兼良の例から見えていくことにしよう。兼良が初めて『源氏物語』を参照したのは、「なまめいたり」という難解な形容詞を説明した時である。

表

	愚見抄	肖聞抄	惟清抄	闕疑抄	拾穂抄
初段					
むかし				●	●
なまめいたる	●				
かいまみ	●	●	●	●	●
こちまどひ				●	
つみで				●	
みやび	●		●	●	
2段					
まめ	●				
おきもせず					●
10段					
むこがね					●
14段					
夜ふかく				●	●
15段					
何条	●			●	●
16段					
手をおりて				●	●
21段					
うとく成にけれ				●	●
24段					
かこと	●				
39段					
蛍	●			●	
40段					
げしう			●	●	●
41段					
ろうさう					●
49段					
初草の			●	●	●
63段					
つくも	●	●		●	
75段					
岩間より	●			●	
77段					
めはたかい				●	●
85段					
思へども			●	●	●
93段					
あふな～～					●
94段					
ろうじて					●
96段					
かきをきて					●
101段					
うへに					●
107段					
あさみこそ			●		

いとなまめくとは、最媚とかけり。女のかたちのこびたるをいへり。

秋の野になまめきたてる女郎花

とよめる、この心也。又生の字を、なまめくともよめり。それはなま／＼しく、ならぬことをいへり。いたるが女車をみてよりきて、とかくなまめく、と下の詞にみえたり。このなまめくは、けしやうする心也。なま／＼しきふるまひする心になへり。『源氏』の詞に、なま／＼のかんだちめなどいへるも、しやうとく（生得）に種姓よき人にてはなくて、なまなりなる心をいへり。かやうの詞は、ところにより事にしたがひて用かへたる事ある也。⁽²⁾

兼良は、まず「なまめく」を、漢字、すなわち「真名」でどう表記するかを示し、次に『古今和歌集』所載歌から類例を指摘している。ところがそれに続けて、他の意味や用例など『伊勢物語』解釈とは無関係に思える事柄に関して更に考察を加えていく。ここでポイントになるのは、兼良が言葉というものは一つの語義に限定することができない、いやむしろ文脈によって意味が変わるものだ、と力説する点である。いずれにせよ兼良は、本稿で取り上げた注釈者達のなかで、この「なまめいたり」の解釈に関して『源氏物語』に言及した唯一の人物である。

一方、「かいまみ」の解釈については、本稿で取り上げている全ての注釈者が『源氏物語』を参照する。兼良は、「垣間見」と漢字を示した上で、「かきのひまよりのぞく事也」と語義を指摘する。⁽³⁾更に兼良は『日本書紀』を引用した上で、最後に『源氏物語』などにも、この詞はみえたり」と述べる。この一文はカノンである『源氏物語』との語彙の共有を指摘することで、『伊勢物語』の権威を示そうとしたものであろう。肖柏は、この語に更にもう少し注意を向け、漢字表記を「垣間（見）也」と示した上で「たゞ物ごしなどに、ほのかにみたる心なるべし。如此いへる、ゆうなる

べし⁽⁵⁾」と述べている。最終的に、この問題を整理した幽齋は、以下のように記している。

かいまみ、『源氏』などにおほき言葉なり。『日本記』より出たる言葉なり。垣間見^{かいまみ}、かきのひまよりのぞき見る心也。爰をばのぞくと見ては、不二^ず幽玄^{ゆうげん}。物越などに、ほのかに見たる心なるべし⁽⁶⁾。

宗祇や三条西家の解釈によれば、業平の行為は当然「幽玄」でなければならぬのに、覗き見はおよそ「幽玄」とはいい難い。このため、ここではその言葉が何か他の意味を表している必要があるためである。

季吟は肖柏の『伊勢物語』説を引用するが、興味深いことに、『源氏物語』『空蟬』の垣間見の場面に関しては、『湖月抄』において否定的に捉えた様子がない。問題の『源氏物語』の一節を読むと次のようにある。

あはつけしとは思しながら、まめならぬ御心はこれもえ思し放つまじかりけり。見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、ひきつくるひ側めたる表面をのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などはまだしたまはざりつることなれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう見たまはまほしきに、小君出でくる心地すればやをら出でたまひぬ。渡殿の戸口に定りあたまへり⁽⁷⁾。

季吟は、延宝元年（一六七三）成立の『湖月抄』の注釈で、「かいまみ」という言葉について「かげよりはづかに見たる也」と簡単に説明している。その上、補足説明として、天正三年（一五七五）成立の九条植通著『源氏物語』注釈書『孟津抄』が「かいまみ」に当てたさまざまな漢字を単純に引用しているのとどめている⁽⁸⁾。そして、同じよう

に「幽玄」であるはずの二人の貴公子のうち、なぜ光源氏には「のぞき見」が許され、一方の『伊勢物語』の主人公には許されなかったのか、という理由は明らかにしていない。

『伊勢物語』の解釈をするにあたり、最も多く『源氏物語』からの情報を用いたのが幽斎である。初段の注において、『伊勢物語』の「むかし」と『源氏物語』の「いづれのおほんときにか」を比較し、『伊勢物語』の主人公の「心地まどひ」を説明するために、光源氏が夕顔を見そめた場面に言及している。

心地まどひにけりは、はや心をかけたる儀なり。かゝる故郷にか様の人のすむを、おもひがけぬ事かなと心ちまどふなり。『源氏』に、五条の家にて夕顔のうへを見そめたる心に似たり。⁽⁹⁾

『伊勢物語』の第二首目の和歌を初段で主人公が姉妹に贈った歌の返歌として扱おうとする解釈は（その歌は実際には源融（八二二―八九五）によつて詠まれたという事実にかかわらず）、肖柏まで遡る。幽斎も、その第二首目の和歌は姉妹の返歌であると解釈し、やはり『源氏物語』を参照している。具体的には、「空蟬」巻の終わりに空蟬が源氏への返歌として、歌人の伊勢作の和歌をそのまま全て引用していることに注目し比較分析している。

『伊勢物語』初段における『源氏物語』参照の最後の例は、「みやび」という語についてである。まず、兼良は以下のように説明している。

みやびは、『日本紀』「風姿」とかきてよめり。みやびかにはやぎたるすがた也。こゝのみやびは、いさゝか心かはるべし。人を仮粧ケンシヤウしたることを、みやびといふにや。『源氏物語』の中に、あまた所にあり。その心を得てみ

るべき也。但『源氏』にいへるは大略たいりやくみやびなる心なり。⁽¹⁰⁾

肖柏は、『源氏物語』には言及せず、いわゆる天福本『伊勢物語』勘物への言及（詳細は後述する）をもって「みやび」を「みやび なさけをかはす心也。定家卿註也」と単純に定義するにとどまっている。そして、『源氏物語』を最も参照している注釈者はまたも幽齋である。

みやび、みやびをばかはすなど云て、ゆうゑんにけさうしする事を云。風姿ふうし、『日本紀』風流ふうりゅう、情などやうの事なり。『八雲御抄』に、情也、精也、両事同事也。心も情けも有事によりてなり。『源氏』若菜卷わかなのまきにも、此君は物のみやび深くふかとくのひ給ふ人、といへり。又、三日のほどに、彼院よりもあかしの御かたへいかめしくめぐらしくみやびし給ふ、といへり。是等にてよく聞えたり。みやび、みやびか也と云詞、其心みやびをかはすなど云は、なさけといふ、同心(12)歟。

幽齋の注釈は、基本的には肖柏の説を繰り返しているものの、その上で『源氏物語』からの二例を引用しどちらの例も、何か情をもつてすることを意味するのではないことを示し、むしろ『源氏物語』における「みやび」の意味には「(前略)好色の用法がほとんどない」という鳥山紫織氏の現代の研究成果を裏付ける形になっている。言い換えれば、「みやび」の語法は、『伊勢物語』の時代から『源氏物語』の時代にかけて実際に相当に変化したのだが、これらの語意に一貫性を持たせたかった幽齋は、このパドックスに直面し、『天福本』の最後に書かれた「みやび」の語法に対する定家の疑問を、単純に繰り返すことで難を逃れたように見える。(定家の書き入れの意味はわかりにくい)が、「詩

的情感の交換」である「みやびをかはず」と「同情の交換」としての「なさけをかはず」は同じ意味ではないのか、という疑問を示しているように思われる。

幽齋は、自身の『闕疑抄』に最も頻繁に『源氏物語』を参照したのであるが、一方では他の注釈者と比べて必ずしも最も深く『源氏物語』を利用しているとはいえない。『伊勢物語』と『源氏物語』の対応関係において認められる間テクスト性の良い例は、第二段に関して季吟が引用した貞徳説に確認できる。これは、『伊勢物語』の主人公を象徴する「まめおとこ」、すなわち「誠実な男」という語句についての注釈である。少なくとも肖柏やその同時期の注釈者たちは、物語の著者であり語り手である業平がこの言葉でもって自画自賛していると主張している。後代の貞徳の解釈はよりもっと巧妙で、事実、それは「小説的」とでも呼ばれるべきものだと思う。非常に含蓄に富むので、季吟が引用する記事を最初から最後まで示そう。まずは、『伊勢物語』二段を記す。

むかし、おとこ有けり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし、それをかのまめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけむ、時は三月のついたり、雨そをふるに遣りける。起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

季吟は、同段の語句について、以下のような注釈をつけている。

まめおとこ 真名伊勢物語に「斂夫」と書。玄好色は美人あるまじけれども、業平の自記なればかく書にや。師

主ある人に物いひしをかくさんとて、態実人と云也。(中略)

おきもせずねもせで

(中略) 師此歌、恋の歌と心を付てみれば深き恋の心にて、只をもてばかりは恋の歌と

こゆる詞なし。是もぬしある女に遣ツカハス歌なれば、用心なるべし。詞書の「けらし」「まめ男」「物がたらひ」「いかゞ

思ひけん」と書し心ばへにて思案すべし。源氏夕顔の巻に、態あらぬさまに書かへて返歌の事あり。又、若菜の

巻に、柏木の右衛門のかみの女三の宮への文を用心なくて書て、源氏の君見あらはし給ひて、あたらの文を思

ひやりなく書たりと見落し給へる事侍るも、此伊勢物語の此段の心にかよひて面白く侍(15)にや。

この和歌に関して幽斎は、恋歌を作りたいと思つた時はまるで業平のようにこの段の歌の情感を持つて詠むべきである、とした定家の見解を『京極中納言相語』から引用しているのだが、季吟は、それを更に引用している。一方、その歌を第二段全体と関連付け、『源氏物語』に結びつけているのが貞徳である。

換言すれば、貞徳は『伊勢物語』二段の話と『源氏物語』中で密通に身を委ねその胸中を偽り隠している男性たちや想いを隠しきれていない男性の描写を結びつけ、また、両物語の作者の意図をも関係付けているのである。確かにそこに見られる恋の計略などは取り立てて珍しくない。そのような駆け引きはおそらく相当多くの密通関係を守る役割を果たしており、他の物語にも似た例を見つかることもできるだろう。しかし、上の解釈で意義深いのは、貞徳が、『伊勢物語』と『源氏物語』が最も重要な物語でありその関係性は特別である、と見做している点である。『伊勢物語』の散文は極めて単純であるが故に、読者が主人公たちや彼らの置かれた状況について想像することが難しい。しかし、大変詳細な叙述を持つ『源氏物語』との類似点を指摘することで、『伊勢物語』の読者が単純な話の背後にある深い内容を想像できるようになり、二つの物語の対応関係を意識することが、一見単純そうに見える『伊勢物語』のエピソード

下の鑑賞に奥行きを与えていることは、言うまでもない。

一方で、『源氏物語』の参照が避けられない場合もある。例えば『伊勢物語』十六段中の最初の和歌の上の句が、「帚木」巻でほぼ言葉通り引用されているような場合である。しかしながら、この二つの歌を取り巻く文脈はまったく異なる。まず『伊勢物語』を示す。

むかし、紀の有常(ありつね)といふ人(あり)有りけり。三世(よ)の帝(みかど)につかうまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりければ、世の常(つね)の人のごとくもあらず。人がらは、心うつくしくあてはかなることを好みて、こと人にも似(に)ず。貧しく経(へ)ても、猶昔(むかし)よかりし時の心ながら、世の常(つね)のことも知らず。年(とし)ころあひ馴(な)れたる妻(め)、やうく床離(とこはな)れて、つみに尼(い)になりて、姉(あね)のさきだちてなりたる所(ところ)へ行くを、おとこ、まことにむつまじきことこそなかりけれ。今はと行くを、いとあはれと思(おも)けれど、貧(まづ)しければ、するわざもなかりけり。思(おも)ひわびて、ねむころにあひ語らひける友(とも)だちのもとに、「かうく／＼今はとてまかるを、何事(なにこと)もいさ／＼かなることもしえせ遣(つか)わすこと」と書(か)きて、おくに、

手を折(よ)りてあひ見し事をかぞふればとおといひつゝ四(よ)つは経(へ)にけり

かの友(とも)だち、これを見て、いとあはれと思(おも)ひて、夜(よる)のものまでをくりてよめる。

年(とし)だにもとおとて四(よ)つは経(へ)にけるをいくたび君(きみ)をたのみきぬらん(16)

この「手を折る」という表現は、『源氏物語』では、「帚木」の雨夜の品定めで、左馬頭の恋愛失敗談に用いられる。問題の場面では、男の不貞について男女が言い争っている。

(前略) 腹立たしくなりて、憎げなることどもを言ひはげましはべるに、女もえをさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せて喰ひてはべりしをおどろおどろしくかこちて、『かかる傷さへつきぬれば、いよいよまじらひをすべきにもあらず。辱めたまふめる官位、いとどしく何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり』など言ひおどして、『さらば、今日こそは限りなめれ』と、この指をかがめてまかでぬ。

『手を折りてあひみしことを数ふればこれひとつやは君がうきふし

え恨みじ』など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、

うきふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをり

など言ひしるひはべりしかど、まことには変るべきことも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさず(後略)⁽¹⁷⁾

『伊勢物語』十六段では、夫婦の語らひは年齢と共に減つていき遂には完全に途絶え、そして人生の終焉を意識した妻は往生を願ひ、残された日々を姉とともに尼となることを決める、と語っている。この話から見てとれるのは、妻側、或いは夫側どちらにも、この決断に際し激しい苦しみや恨みを連想させる部分がないということである。これは、妻の決断が平安時代の貴族階級にあつてかなり典型的な人生の送り方であつたためといえる。にもかかわらず、幽齋も季吟も、第十六段の場面に『源氏物語』にあるような男女のような憤り・恨みを読み取らずにはいられないのである。

十と云つゝ四は経にけりを、十四年と云説あれ共、唯四十年あひそひたる物がとこはなるゝ処の名残を、いかにと推量あれと云心也。又、年ごろなれし中も、真実にむつまじき心をもたぬ女にて、かゝる折節とこはなるゝ心中を、業平に御推量あれと、女を恨みたる心籠れり。『源氏』はゝき木手をおりてあひみしことをかぞふればこれひとつやは君かうきふし上句、此物語におなじ。女の離別のさまの相似たる歟。(18)

この注釈からは、幽斎と季吟の両者共が、次の二点、つまりもしこの妻が夫を棄てるのであれば彼への愛はたいして深いものではないこと、そして夫は実際のところ「去られた」ことよりむしろ妻の愛情の薄さを恨んでいる、と判断したことが見て取れる。これは一種の常識的な理解であつて、捨てられた夫が恨むのは当然である。そして、『源氏物語』のテクストを参照して『伊勢物語』を考察した場合、憤りや恨みを読み取る解釈はほぼ確実に避けられなくなつてしまふだろう。

幽斎は、『伊勢物語』二十一段もまた『源氏物語』の「雨夜の品定め」を広範にわたつて読み込んだ上で解釈している。以下が同段の話である。

むかし、おとこ女、いとかしこく思ひかはして、異心なかりけり。さるをいかなる事かありけむ、いさゝかなることにつけて、世中を憂しと思ひて、出でて去なれと思ひて、かゝる歌をなんよみて、物に書きつけける。出でて去なば心軽しといひやせん世のありさまを人は知らねば

とよみをきて、出でて去にけり。この女かく書きをきたるを、異しう、心をくべきこともおばえぬを、何によ

りてかかゝらむと、いといたう泣きて、いつかたに求めゆかむと、門に出でて、と見かう見見けれど、いづこを
はかりともおぼえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎりて我や住まひし
といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらん玉かづら面影にのみいと見えつゝ

この女いと久しくありて、念じわびてにやありけん、いひをこせたる。

今ほとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずも哉

返し、

忘草植ふとだに聞く物ならば 思けりとは知りもしなまし

又／＼、ありしより異にいひかはして、おとこ、

わする覧と 思心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき

返し、

中空に立ちあふる雲のあともなく身のはかなくもなりにける哉

とはいひけれど、をのが世ゝなりにければ、うとくなりにけり。

幽齋のこの部分の注釈はかなり長い。『源氏物語』は注釈の末尾に参照され、言及はエピソード全体に及ぶ。そして、以下の通り幽齋は、左馬頭の女性論から広範囲にわたって引用している。

私^{わたくし}曰^{いはく}、はゞき木の巻^{まき}、品定^{しなさだめ}の所に、えんにものはぢして、恨^{うらみ}いふべき事をもみしらぬさまに忍^{しの}びて、うへはつれなくみさほつくりて、心ひとつに思ひあまる時は、いはんかたなくすこきことのは、哀なる歌をよみをき、しのぼるべきかたみをとどめて、ふかき山里、世はなれたる海づらなどにはひかくれぬかし、とあり。此心をみしらぬやうにげかくれて、人をまどはし、心をみんとする程に、ながき世の物おもひになる、いとあぢきなきことなり。心ふかしやなどほめたてられて、あはれすゝみぬれば、やがてあまに成ぬかし。思ひたつ程は、いと心すめるやうにて、世にかへりみすべくもおもへらず、いであなかなし、かくはたおほしなりにけるよなどやうに、あひしれる人きとぶらひ、ひたすらにうしともおもひ離^{はな}れぬ男、きゝつけて涙^{なみだ}おとせば、つかふ人ふるごたちなど、君の御心は哀^{あはれ}なりけるものを、あたら御身をなどいふ。身づからひたひがみをかきさぐりて、あへなく心ほすければ、うちひそみぬかし。忍^{しの}ぶれどなみだこぼれぬれば、折々ごとにえねんじえず、くやしき事もおほかめる。仏も中々心きたなしと見給ひつべし、など書たり。是も前後女の堪^{かん}忍^{にん}性のなき故也。猶おくに、あまにもなさでたづね取たらんも、やがてあひ添^{そひ}てとあらんおりも、かゝらんきざみを見すぐしたらん中こそ、契^{ちぎり}ふかく哀^{あはれ}ならめ、我も人もうしろめたく心をかれじやは、とあり。

そして、幽齋は「此段の初中後よく似かよひたり。」と評しているのである。ところが、その後に論点外れとも思える引用をもう一つかさねる。

又同所に、女房などの物がたりよみしを聞て、いと哀にかなしく心ふかき事かなと涙をさへおとし侍し

それから以下のように結論付けている。

などあれば、此物語の事などにもあるべきか。いさゝかかはる所なし。⁽²⁰⁾

しかし、実際のところ、この二つの物語は同一だとは言いがたく、類似点は限定的である。つまり、『伊勢物語』中の件の女はこれから尼になろうとしているのであって、また周りの者たちもそれを勧めてもいない。似ている点は、去つていく女、女が男に残した別れの歌、和解(左馬頭による描写はないが)、未練がましい恨みに限定される。これらは、おそらく幽斎が似ていると見做した「此段の初中後」の構成要素であろう。それにしても幽斎は、なぜ左馬頭が女房が物語を読むのを聞いて泣いた、という記事をあえて引用したのだろうか。おそらく幽斎は、左馬頭が耳にして泣いた話とは、まさにこの『伊勢物語』の段の他にはないということを信じていたのではないか、と思われる。さもなくば、この引用の仕方は全く意味をなさないのである。とはいえ、幽斎の『伊勢物語』二十一段と左馬頭の話の関係性についての説明が、充分明らかにされているわけではない。幽斎は紫式部が左馬頭の話を執筆するにあたって第二段を元にして、或いはそれを式部が仄めかしている、と明言しているだろうか。そもそも注釈が記す「似かよひ」とは、厳密には何を意味するのだろうか。どうやら幽斎は、兼良のように二つのテクストを比較し出来事としての類似点を検証することに興味を持っているだけではなく、そうした類似点が作者によって生み出されるという執筆過程を推量することにも、関心があるように思われる。そこで『伊勢物語』三十九段にある有名な車の中に蜩を放つという一節に着目してみよう。

むかし、西院の帝と申す帝おはしましけり。その帝の皇女、崇子と申すいまそかりけり。その皇女うせ給て、御葬の夜、その宮の隣なりけるおとこ、御葬見むとて、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しう率て出でたてまつらず。うち泣きてやみぬべかりかる間に、天の下の色好み、源の至といふ人、これも物見るに、この車を女車と見て、寄り来るとかくなまめく間に、かの至、螢をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆるらん、ともし消ちなむずるとて、乗れるおとこのよめる。（後略）⁽²¹⁾

兼良は以下の注釈で、この二つのテキストの関係性について非常に明快に説明している。

女のかほをみると、ほたるを車のうちへ入たる也。色ごのみの人なれば、かゝる用にかねてほたるを紗のふくろなどにあつめてやもちたりけん。『源氏』の螢の巻に玉かづらの事をいへる、同心也。⁽²²⁾

この文でいう「心」という語については、「趣向」或いは「工夫」と理解できるだろう。それはともかく、どうも兼良は二つのテキストの関係性そのものに関心を持っているように思われる。

一方、兼良の注釈と比べて幽斎の以下の注釈を見ると、この問題を異なる方法でもって考察しているように思える。

『源氏』^(巻) 螢の局に、玉かづらの君を兵部卿の宮にみせ奉らんとて、源氏の、ほたるをうすものにつゝみて、みすのうちにいだされたる事、此段に相似たり。此物語をみて書出せるにや。⁽²³⁾

この注釈からは、幽齋が、二つのテキストの関係性を論じているのではなく、紫式部という作者について考察しているように見える。幽齋の考察は、『源氏物語』の起源そのものについての中世的想像を膨らませること、つまり、紫式部が石山寺にあつて琵琶湖の水面に映る月を見て着想を得、「須磨」巻を書き始めたのだという「執筆過程」に着目するという考察に近いかも知れない。両注釈を比較した時興味深いのは、兼良が二つのテキストを参照・照合することで『源氏物語』への影響を断定しているのに比べ、後発の幽齋は執筆過程を推察し、その直接的な影響については仮定的に示唆することに止まっている点である。

終わりに、『源氏物語』の参照が、むしろ問題を複雑化させてしまった例を指摘しよう。以下の、『伊勢物語』四十九段の兄妹の歌のやり取りの話がそれである。

むかし、おとこ、妹(いもうと)のいとおかしげなりけるを見をりて、

うら若わかみ寝ねよげに見ゆる若草わかを人の結むすばむことをしぞ思(おもほ)

と聞きえけり。返し、

初草はつのなごめづらしき言ことの葉はぞうらなく物を思(おもひ)ける哉(かな) (24)

当然、第一の問題は、妹の返歌が本当のところは何を意味するかという点である。この問題は、『源氏物語』で(同腹)の姉である女一の宮との会話の中で、匂宮が彼女に御簾越しに詠んだ和歌を参照することで提起される。『源氏物語』の一節は次の通りである。

時雨しぐれいたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に参りたまひつれば、御前おまへに人多くもさぶらはず、しめやかに、御絵など御覧するほどなり。御几帳ばかり隔てて、御物語聞こえたまふ。（中略）御絵おゑどものあまた散りたるを見たまへば、をかしげなる女絵をんなゑどもの、恋する男をとこの住まひなど描きませ、山里のをかしき家居いへなど、心々に世のありさま描きたるを、よそへらること多くて、御目とまりたまへば、すこし聞こえたまひて、「かしこへたてまつらむ」と思す。在五ざいごが物語を描きて、妹に琴教きんぎょうへたるところの、「人の結ばむ」と言ひたるを見て、いかが思すらむ、すこし近く参り寄りたまひて、「いにしへの人も、さるべきほどは、隔てなくこそならばしてはべりけれ。いと疎々うらうらしくのみもてなさせたまふこそ」と、忍びて聞こえたまへば、いかなる絵にかと思すに、おし巻き寄せて、御前おまへにさし入れたまへるを、うつぶして御覧する御髪みぐしのうちなびきて、こぼれ出でたるかたそばばかり、ほのかに見たてまつりたまふが飽かずめでたく、すこしもの隔てたる人と思ひきこえましかばと思すに、忍びがたくて、

若草のね見むものとは思はねどむずぼほれたる心地こそすれ」

御前おまへなる人びとは、この宮をばことに恥ぢきこえて、ものうしろに隠れたり。ことしもこそあれ、うたてあやしと思せば、ものものたまはず。ことわりにて、「うらなくものを」と言ひたる姫君も、ざれて憎く思(25)さる。

着目すべき問題は、妹のいう「うらなく」の意味である。兼良は、「うらなくは、妹の心に、中将をよのつねのおとゝひの思ひをなしてたのみたるをいふ也(26)」と説明している。

青木賜鶴子氏がすでに指摘するように、宗祇や三条西家の解釈では『伊勢物語』のエロティックな性質は否定され、教訓的に解釈された。そのような解釈にあつては、件の兄の和歌のエロティックな性質は否定され、兄の和歌は結婚

という妹の将来を懸念したものだど理解される。そして、青木氏は、この「憐憫説」と対照的な「懸想説」について更に重ねて述べている。「懸想説」は、『肖聞抄』の文明九年（一四七七）成立本への宗長の記注にて強く否定されている。が、延徳三年（一四九一）本の『肖聞抄』⁽²⁷⁾では宗祇が少なくとも「懸想説」の可能性を許している、という点を肖柏が認めている。文明十二年（一四八〇）本の『肖聞抄』では、『源氏物語』のこの部分は「懸想説」の解釈が正しいとされているが、詳しくは述べない。⁽²⁸⁾

宣賢も、また『惟清抄』でこの段の解釈のために『源氏物語』を参照しているが、以下のように、兄妹の間にエロティックな意図があったことを否定している。

常二ハ。業平ノ妹ヲ。ケサウシテ。ヨムトイヘドモ。シカラズ。妹ヲ不便ニ思テ。憐愍ノ心ニテイヘル也。（中略）

業平ノ。思ヒモヨラヌ詞ヲ。カクル物カナ。是程マデ。ウラナク。底ニ徹シテ。我事ヲ思フ事ノ有ガタサヨト也。

『源氏』ノ総角^{アケマキ}ニ。匂フ兵部卿ノ宮ノ。一品ノ宮ニ。絵ミセマイラセラル、時。ウラナク物ヲト。イヒタル姫君モ。ザレテ。ニク、オボサルト云リ。⁽²⁹⁾

匂宮の女一の宮への想いを引用し終わらせているこの注釈は、宣賢が、兄妹の間についてどのような解釈を持っているか、特にその憐憫的解釈と懸想的解釈の間には明瞭な違いがなかったのではないか、といった疑問をもたらす。宣賢の説明と『源氏物語』の引用には矛盾が感じられるが、これは聞書の内容がそのまま『惟清抄』に記されているためであろう。いずれにせよ、『伊勢物語』四十九段の妹の行為を解釈するために、匂宮の例を検討する方法が目指していた点、それは、『伊勢物語』の妹が、ウイットに富んだ当意即妙の応答で兄から言い逃れるより、むしろ『源氏物語』

の女一の宮がしたように兄の本意がさっぱり掴めないと少しも返事をするべきではなかったか、ということを明らかに示すことである。ここでポイントとなることは、宣賢が、妹が機知に富んだ対応（すなわちそのことは彼女が兄の真意を理解していたことを示すのだが）ではなく、『源氏物語』の女一の宮のように無反応であるべきだった、と考えている点である。言い換えると、『伊勢物語』の妹は兄の和歌の本意を理解し返歌をしたとされたことで、彼女の純潔さに傷をつけてしまったということになる。

この状況は幽斎の注釈において、より鮮明になる。幽斎は、最初の和歌について宣賢の解釈を踏襲した後、妹の和歌についても宣賢の解釈を踏襲し『源氏物語』の匂宮の例に言及し、そして更に以下のように続ける。

是よきとりあはせにてはあり。されども、此歌の心をば、かくは心得まじきなり。二条家の心などに、更に左様には有まじき事なり。『伊勢物語』『源氏』などは、好色をば本とせず。『毛詩』三百篇も、男女の事をもつて政道の本とせり。ものをとゞのふる事、女也と云故也。それをたゞ好色のかたを本としていふべき事、何の曲もなき事なり。『梵網経』などにも、いましめてかけり。『梵網経』の十重禁戒之中第二、姪戒云不捉畜生乃至母女姉妹六親行姪無慈心者是菩薩波羅夷罪と云も、兄弟の事にいひたるなり。か様のいさめをなさん為に書たるものなり。女子などをばいかにもよくはぐむべき事と云儀が肝要也。爰をならひに申也。いもうとに心を付て、行末を思ひたる所、後に露頭する也。うらなくは、底に徹して、か様におぼしいれたる心よと見て、にくき方とは思ふべからず。⁽³⁰⁾

幽斎は、『毛詩』を例にとつて、古典作品中の男女のロマンティックな関係の叙述というのは、実際のところ皇帝とそ

の臣下らの関係を意味しているのだと論じる。それでその上全くもって非論理的なのだが、この話は不道德的な行為を論ずために敢えてそうした行いを表現しているのだと、教訓的理解を示しているのである。最終的に幽斎は、この段の話を、主人公である男が自分の家の女が求愛を受けていることを知り、未熟な彼女の代わりに和歌を書いてやるという、『伊勢物語』百七段の話と結びつける。つまり（宗祇以降の第四十九段と第七段の男女は同一人物であるという解釈を前提として）、第七段の主人公の男は、保護すべき対象の女が結婚するのを助けているのであり、四十九段の兄の妹を思う感情を、後に続く段の男の保護者的な感情に結びつけようとしているのである。要するに、この男は女の恋の成就を助けているのだ、と説明している。おそらくこのような注釈の曲折は、もし『伊勢物語』の和歌が『源氏物語』に用いられなければ、避けられたであろう。

結びにかえて

『源氏物語』はさまざまな形で『伊勢物語』の解釈に用いられた。最も単純なものは、兼良が「かいまみ」や「みやび」の語法について言及したように、『源氏物語』に登場する言葉でもって、『伊勢物語』に中のその言葉を確認するということである。勿論、この方法は、学者達が『伊勢物語』と『源氏物語』の言葉の用法が同じであると見做した場合、幽斎が「みやび」という言葉の解説に関して混乱をきたしたように、さまざまな問題を引き起こした。これは、『源氏物語』の持つ威信が、注釈者を束縛して問題を誘引したのであり、この問題は、契沖（一六四〇—一七〇一）とこの解決のための文献学的方法の登場まで続く。一方兼良の場合、『伊勢物語』中の言葉（具体的には「なまめく」の語）は『源氏物語』の中で同じ意味を持たず、その語意は「ところにより、ことにしたがひてもちやかへたる」の

だと力説していた。

私見では、『源氏物語』の最も典型的な参照のあり方とは、『伊勢物語』の控えめな描写に文脈と綿密さをもたらすことだと思われる。例えば『伊勢物語』初段では、姉妹を垣間見たことによって若い男が心乱れ「こちまどひ」となったことを描写しているが、幽斎は、読者の鑑賞のためにもう少しその話の状況を具体化すべく、光源氏が初めて夕顔と出会った話と関係付けている。同様に、貞徳の第二段の密通に関する連想にしても、『伊勢物語』の文章のみを鑑賞するより『源氏物語』の話と照合することで、読者の物語へのより深い考察を可能にするのである。

しかしながら、この『源氏物語』の参照は、『伊勢物語』本来の話で大抵のところ歪めてしまう。『伊勢物語』十六段にある紀有常の妻が尼になるべく彼の元を去る話に対し、『源氏物語』の「雨夜の品定め」中の頭中将の話を引き合に出したことで、第十六段には本来認められない「恨み」の要素が加えられる。『伊勢物語』二十一段のある夫婦の関係の変化は、幽斎によって『源氏物語』に結び付けられた時、女側の「堪忍」の必要性への論考にすりかわる。そして最後に、『伊勢物語』四十九段の妹の返歌を解釈するために、『源氏物語』の匂宮の女一の宮への感情を考察することは、宗祇らの『伊勢物語』に対する教訓的理解の影響を受けつつ、紆余曲折を経て、結局、この二つのテクストの間に乖離があることを示すことになるのである。端的にいえば、『伊勢物語』解釈に『源氏物語』を参照することは、理解の助けとなるよりむしろ妨げとなっていた可能性が高いのではあるまいか。

付記 本稿は二〇一七年五月国文学研究資料館で開催された「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」第4回研究会における口頭発表を再構成したものである。ご教示くださった各氏、特に山本登朗氏と藤島綾氏にお礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 『伊勢物語愚見抄』の初稿本は長祿四年（一四六〇年）、再稿本は文明六年（一四七四年）に成立。大津有一『伊勢物語古註釈の研究』（八木書店、一九八六年）、一八九頁。
- (2) 「伊勢物語愚見抄」（片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古註釈大成』第三卷、笠間書院、二〇〇八年）、五頁。
- (3) 「かいまみは、垣間見とかく。かきのひまよりのぞく事也。『日本紀』には、視二其私屏一とかきて、かいまみとよめり。『源氏物語』などにも、此詞はみえたり。」（『伊勢物語古註釈大成』第三卷）、五十六頁。
- (4) 『首聞抄』延徳三年本（『伊勢物語古註釈大成』第三卷）、一七八頁。
- (5) 「伊勢物語首聞抄 延徳三年本」（片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古註釈大成』第三卷、笠間書院、二〇〇八年）、一七八頁。天理大学附属天理図書館蔵本には、「只物ごしなどにほのかにみたる心なるべし。此義優なるべし。源氏物語などにみゆ。」とある。竹岡正夫著『伊勢物語全評釈』右文書院、一九八七年、五三頁。
- (6) 「伊勢物語闕疑抄 寛永十九年刊本」（片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古註釈大成』第五卷、笠間書院、二〇一〇年）、一九〇頁。
- (7) 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男編『源氏物語』1、新編日本古典文学全集 20（小学館、一九九四）、一二二―一二三頁。
- (8) 北村季吟、有川武彦校訂『源氏物語湖月抄』（講談社、一九八二年）、上、一五〇頁。
- (9) 前掲注6、一九一頁。
- (10) 前掲注2、七頁。

- (11) 前掲注 3、一七九頁。
- (12) 前掲注 6、一九二頁。
- (13) 鳥山紫織『源氏物語』の「みやび」(関西大学国文学会編『國文學』第九号、二〇一二年三月) 三七二頁。
- (14) 堀内秀晃、秋山虔編『竹取物語 伊勢物語』 新日本古典文学大系 17 (岩波書店、一九九七)、八〇―八一頁。
- (15) 片桐洋一・青木賜鶴子編著『演習伊勢物語 拾穂抄』(勉誠社、一九八七年二月)、一五―一六頁。
- (16) 前掲注 14、九五―九六頁。
- (17) 前掲注 7、七三―七四頁。
- (18) 前掲注 6、二一〇―二一一頁。
- (19) 前掲注 12、一〇〇―一〇一頁。
- (20) 前掲注 6、二一七―二一八頁。
- (21) 前掲注 14、一一六―一七頁。
- (22) 前掲注 2、三二頁。
- (23) 前掲注 6、二三〇頁。
- (24) 前掲注 14、一二六頁。
- (25) 前掲注 7、第五卷・三〇三―三〇五頁。
- (26) 前掲注 2、三八頁。
- (27) 『昔聞抄』文明九年本…「心は、我いもうとなれば子細なしとみれば、他人はいかゞ思ふらんや、と猶いもうとを あはれむ心也。」

『首聞抄』文明一二年本…(前略) 又の儀、いもうとをけさうしていへる心もありと云々。源氏物語には此心と見ゆ。

『首聞抄』延徳三年本…(前略) 又の儀、いもうとをけさうしていへる心もあり。」

(28) 青木賜鶴子「室町後期伊勢物語注釈の方法―宗祇・三条西家流を中心に―」(中古文学会編『中古文学』第三四号、一九八四年一〇月)、三〇三―三二四頁。引用の『伊勢物語首聞抄』は、片桐洋一著『伊勢物語の研究(資料編)』(明治書院、一九六九年一月)に収載の文明一三年(一四八一)成立本。

(29) 「伊勢物語惟清抄」(片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成』第四卷、笠間書院、二〇〇八年)、四〇頁。

(30) 前掲注 6、一三三九頁。

References to *The Tale of Genji* in Medieval Commentaries
to the *Ise Monogatari*

JOSHUA MOSTOW

Although *The Tale of Genji* (ca. 1008) was written over one hundred years after the earliest version of the *Ise monogatari* (ca. 880), commentators from the Muromachi through Edo periods occasionally referred to *Genji* to explain a word or textual passage in the *Ise*. We see this as early as *Gukenshō* by Ichijō Kaneyoshi (1402-1481). We also see it in commentaries from the *Sōgi-Sanjōnishi-ke* of commentaries, including *Shōmon-shō* by Botanka Shōhaku (1443-1527), and the *Isei-shō* by Kiyoharano Nobukata (1475-1550). However, references to *Genji* increase dramatically with the *Ketsugi-shō* by Hosokawa Yūsai (1534-1610) and the *Shūsui-shō* by Kitamura Kigin (1624-1705). The present article examines several cases where the *Genji* is referred to in order to explain a passage in the *Ise monogatari* and examines how such intertextual references influenced commentators' understanding of the earlier text.